

プロトタイプ理論と動的文法理論

松 本 純 一

本論は、認知言語学の代表的著作とされるLakoff (1987) において提案されている、いわゆるプロトタイプ理論と、従来の生成文法理論との間に、考えうる接点を見だし、今後の文法理論の発展への期待を述べるものである。

今世紀の半ば頃、N.Chomskyらによってひとつの画期的な言語理論がもたらされた。それは変形生成文法（現在では単に生成文法と呼ばれることのほうが多い）と呼ばれるようになり、またたく間に現代言語理論の中心的存在へとまつりあげられていった。

この理論が人々を魅了した第一の理由は、何と言ってもそれ以前のアメリカ構造主義言語学の限界を突破し、言語理論の中に意味論を位置づけ、ひいては人間の心 (mind) についての諸問題を解明する手掛かりを与えてくれることを確約してくれたように思われた点であろう。我が国で書かれた入門書の類の中においても、「変形生成文法は言語学に人間の心を取り戻してくれた。」というような意味の記述がさかんにおこなわれていたように思われる。

しかしながら、時が流れ、生成文法が独自の発展を遂げていくうちに、言語学内外の多くの人々から、この理論に対するある種の失望の言葉がささやかれてくるようになったのもまた事実である。すなわち、生成文法は、当初の人々の期待に反して、人間の心・精神の問題に対して、あまり満足のいく貢献をしてくれなかった、あるいは今後もしてくれそうにない、と思われ始めたのである。

確かに生成文法理論は、その最終的な目標とも言える普遍文法の構築にむかって、現在も着実に進歩を続けているようには思われる。しかしながら、そのような進歩の結果として当然期待されるはずであった人間の認知的特性の解明といった問題に対しては、心理言語学の方面からはいくらかの熱心なアプローチがみられたものの、当のChomskyを始めとする生成文法の中心的メンバー達は、ほとんど何も具体的な貢献をしてきていないと言っても過言にはならないだろう。

このような失望の結果として、生成文法と従来からはっきりと対立を示していたさまざまな学派の人々はもとより、本来生成文法の枠組みから出発した人々の間からも、生成文法の言

語観とは真っ向から対立するような言語理論を提案するような動きが徐々に見られるようになってきた。

Lakoff (1987) の著者であるG. Lakoffなどは、さながらそのような反生成文法運動の旗手とも言えるような人物であろう。Lakoffは以前にもいわゆる生成意味論の主導者として、Chomskyらの標準理論系の生成文法と激しい対立を示したことがあったが、今にして思えばこの生成意味論は、所詮は生成文法の一流派にすぎず、そのうえ変形規則の濫用を始めとするいくつかの致命的欠点をかかえていたため、十分な発展を遂げられないままに自己崩壊することになってしまった。

このようなわけで、生成意味論の衰退にともなって一時はとまってしまったかに見えたLakoffらの反生成文法の流れは、近年再び、というよりも今回こそはいよいよ本格的な形で蘇ってきた。それがLakoff and Johnson (1986) におけるメタファーの研究であり、Lakoff (1987) におけるプロトタイプ理論の提案である。

Lakoffらの研究は私達にとって、今度こそいよいよ「言語の研究を通じて人間の精神のしくみにせまってゆく」という目標を実現してくれそうな期待を抱かせるものである。何故ならば、今回のLakoff (1987) などの研究は、これまでの言語理論とは大きく異なり、Roschらの研究を始めとする心理学・認知科学からの知見に強くささえられているからであり、とかく言語学独自の理論立てのみでいわば自分勝手な議論を展開しがちであった従来の生成文法などに比べて、その点において大きな将来性を約束されているように思われるからである。

以上述べてきたように、Lakoffらの研究が大変重要で、高く評価されるべきものであることは間違いのないことと思われる。しかしながら、これからLakoffらの研究が順調に発展を遂げていったとして、そのときには従来の生成文法による研究成果は全く無駄なものになってしまうのだろうか。言い換えるならば、Lakoffらの研究と従来の生成文法における様々な知見とは、全く歩みよる余地のないものであるのだろうか。

結論を先に言うならば、答えは否であると思われる。確かに、Lakoff (1987) 等においてしばしば明言されているように、Lakoffらの言語理論と生成文法を始めとする従来の言語理論とは、その最も基本的な理念・方法論において決定的な相違がある。しかし、「言語を通じて人間の精神へ」という目的意識において共通のものがある以上、両者が互いの長所を生かした上で、手を取りあって共通の目標にむかって歩んでいくということは決して不可能なことではないと思われる。

以下では、そのような将来の可能性を示唆する具体例として、近年日本の研究者によって提案されている一つの文法理論を紹介しようと思う。

ここで紹介する文法理論は、「動的理論」あるいは「非瞬時モデル」「拡張理論」などと呼

ばれているものである。この理論はKajita (1977), 梶田 (1984) 等によって本格的な提案がなされ、その後梶田優氏を中心として何人かの人々によって研究が進められているものであり、その重要なエッセンスについては福地 (1987) において大変要領の良い解説がなされている。以下の記述は、もっぱらこの福地 (1987) の解説によるところが多い。

この文法理論の基本理念は、従来の生成文法理論のように最終的に完成された形の文法の記述のみをめざすのではなく、大人の言語能力においてみられる文法規則のうち、言語習得の任意の段階において獲得される基本的な文法規則と、それに続くより高次の習得段階において獲得される二次的な文法規則とを区別し、言語習得の実情に即した文法記述をおこなっていこうとするものである。この理念は、次のように定式化されている。

A Xという種類の規則は、任意の言語の任意の段階で可能である。

B もしある言語 j の習得段階 i の文法 G^j_i の中に Y という種類の規則が含まれているならば、同言語の次の習得段階 G^j_{i+1} においては、 Z という種類の規則が可能である。

[福地 (1987), p. 50より]

以上が動的文法理論のあらましである。次に簡単な実例として、英語の前置詞構文に関する句構造規則の例を見よう。

(1) He flew from Moscow to Manilla.

(2) The temperature turned from cold to hot.

(1)の文における下線部の前置詞句を生成するための句構造規則は次の(3)であり、(2)の文における下線部の前置詞句を生成するための句構造規則は次の(4)である。

(3) $PP \rightarrow P + NP$

(4) $PP \rightarrow P + AP$

しかし、(3)は英語のごく一般的な規則だと考えられるが、(4)はどんな場合にも自由にあてはまる規則ではなく、ある特定の場合にだけ適用可能な規則だと考えられるので、文法理論の内部で両者を同等の規則として扱うわけにはいかないと思われる。このような場合、動的文法理論の考え方によれば、最初の段階において習得される基本的な句構造規則は(3)のみであり、(4)の句構造規則は(3)が習得された後に二次的に習得されるものと考えれば、文法の一般性を損なうことなしに上記二種の規則の存在を記述することができる。

前節に挙げた実例は福地(1987)からとられたものであったが、次にはもうひとつ、私自身がこの文法理論に即して同様に説明することができると考えている実例を提案してみよう。英語においては、次の(5)の文をもとにして(6)–(8)のような、分裂文と呼ばれる形の文をつくることができる。

(5) I met Taro in the park yesterday.

(6) It was Taro that I met in the park yesterday.

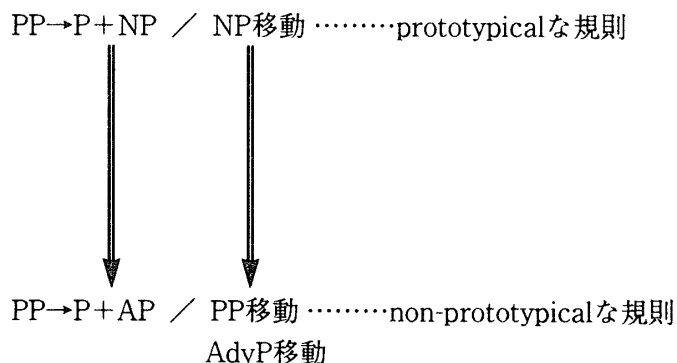
(7) It was in the park that I met Taro yesterday.

(8) It was yesterday that I met Taro in the park.

これらの分裂文の形成においては、何らかの形で各文中の下線部を前方へ移動する移動変形のようなものが関与していることは間違いないと思われる。ところが、移動されている要素は、(6)ではNPであるのに対して、(7)ではPP、(8)ではAdvPである。英語においては移動変形はNPとwh句に対してしか適用されないことになっているので、このままでは明らかに類似した特性をもっている(6)–(8)の文を同等に記述することができなくなってしまう⁽¹⁾。

この場合にも、英語の変形規則においてはNP移動があくまで基本的なものであるが、ある特定の場合に関してはPP移動とAdvP移動も二次的・派生的な規則として存在すると考えることによってこの問題を無理なく解決することができるであろう。

以上、動的文法理論の基本的な考え方とその具体的適用例を見てきた。この動的文法理論は、従来の生成文法理論と完全に対立する理論として提案されたものではなく、あくまで従来の生成文法理論で十分に説明できない部分を補足するために、生成文法理論の有意義な拡大・延長として提案されたものである。それにもかかわらず、この動的文法理論の具体的内容を検討してみると、それは事実上Lakoffらのプロトタイプ理論ときわめて類似した主張に到達していることがわかる。すなわち、先の具体例における句構造規則並びに変形規則の位置付けは、ちょうどLakoffらの研究におけるprototypicalな範疇成員とnon-prototypicalなそれとの区別に相当するものと解釈することができる。



このように考えると、動的文法理論は、従来の生成文法の手法による文法規則の定式化をそのまま受け継ぎながら、それらの諸規則の位置づけに関してはプロトタイプの発想を用いている理論と言える。ここに、従来の生成文法理論とプロトタイプ理論との共存的融合の姿を見ることができるように思うのである。

なお、これらの研究に深く関連する問題として、近年の生成文法理論における「文法の核 (core) と周辺 (periphery)」という概念がある。動的文法理論も、基本的には最近の生成文法のこの概念にもとづいた発想であるということができよう。生成文法におけるこの「核と周辺」という考え方とプロトタイプ理論とがどのような本質的な関連を持っているかは、今後の両者の研究の進展を待って判断されることになるだろう。

さて、以上の考察によって、Lakoffらの主張するプロトタイプ理論と最近の生成文法理論の枠内での研究の間には、期せずしてきわめて類似した方向性がうかがえることがわかった。すなわち、ある範疇内・集合内に、基本的・典型的な成員と、二次的・派生的な成員とを認めようという発想の存在である。このような考え方がどの程度の妥当性をもっているかは、今後より一層次のような観点からの裏付けがなされることによって確認されるべきであろう。

①実験心理学・発達心理学等の具体的研究成果から見て、実際の言語習得においてそのような段階的習得が確認されるかどうか。

②成人の言語使用の具体的場面において、本論で紹介したような実例以外にどの程度そのような説明法が効力を発揮するか。

③言語の歴史的発展の研究においても、①と内容的にある程度類似した現象が観察されるかどうか。

④脳生理学的観点からして、そのような理論が可能であるかどうか。

最後に本論文の要旨をもう一度まとめておくことにする。Lakoff (1987) は、従来の生成文法理論とは全く相容れないものとしてプロトタイプ理論を提案しているのだが、最近では従来の生成文法の枠組みに沿った研究の中にも、結果としてプロトタイプ理論に類似した主張をすることになっているものが存在する。そのような最近の研究について考慮するならば、プロトタイプ理論と従来の生成文法とは、必ずしも根本的に両立不可能なものであるとはいえないように思われる。

もとはと言えば、生成文法も認知言語学も「言語の研究を通して人間の精神の解明へ」という共通の目標の上に始められた研究であったはずである。両者がいたずらに相手を敵対視し、互いの主張にまったく耳を傾けようとしないとしなければ、今後の言語学の健全な発展にとってたいへん残念なことと言わざるを得ない。私達は、両者の内容を十分に理解した上で、それぞれの長所と短所を正しく見極め、できることならば両者の長所をうまく融合させてゆくことによって、今後の言語学の発展を、ひいては人間精神の研究の発展を目指してゆくことが望ましい態度だと私には思われるのである⁽²⁾。

註

- (1) もっとも、このような分裂文の形成にともなう移動が狭い意味での変形規則の一種として認めうるのかどうかということや、変形規則によって移動することが許される要素は本当にNPとwh語句のみに限られるのか、ということについては生成文法の理論的進展にともなって多くの問題をはらんでくる可能性がある。しかし、ここでの議論は、たとえこれらの前提がくつがえされたとしても、基本的には有効であると思われる。
- (2) 生成文法と認知言語学との共存の可能性について、より一般的な観点からいくつかの提案をおこなっているものとしては、Matsumoto (1993) を参照されたい。

引用文献

- 福地肇. 1987. 「動的文法理論の提案」『言語』 Vol. 16, No. 12. pp. 46-53
- Kajita, M. 1977. "Towards a Dynamic Model of Syntax." *Studies in English Linguistics*. 5. pp. 44-76.
- 梶田優. 1984. 「英語教育と今後の生成文法」『言語普遍性と英語の統語・意味構造に関する研究』 pp. 60-94.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1986. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Matsumoto, J. 1993. "A Preliminary for the New Age of Theoretical Linguistics." 『Colloquia』 第14号 (慶應義塾大学) .